

10. 形式の統一. Don Juan Manuel『ルカノール伯爵』(1335)

今回紹介する Don Juan Manuel (1282-1348) の代表作『ルカノール伯爵』*El Conde Lucanor* の形式上の首尾一貫性は徹底している。全編 51 話を通して例外なく次のように進行する。はじめに Conde Lucanor という貴族が Patronio という相談役に「実は…と」いうことで困っている」と言いながら人生の様々な悩みを相談する。Patronio は適切なたとえ話をして結論へと導き、Conde Lucanor はそれに納得し、さらに著者である Don Juan Manuel が教訓を含んだ短詞で締めくくる。多少の変化はあるが基本的にこの枠組みを崩さない。ちょうど毎回の放送番組の開始と終了の部分が同じ形式になるのと似ている。形式を統一するという作者の意図は読者にとって単調なワンパターンになるのだろうか、それとも快適な繰り返しになるのだろうか。

●作者の姿

生真面目と言ってよいほどの作者の性格は作品の随所に現れている。たとえば次の序文を読むと作者としての意識が強く感じられる。「ドン・ファンは経験によって、書物が筆写される際、文字の類似による見誤りから多くの誤記が生まれ、その結果意味が取り違えられ、ときに混乱が生じ、後世の人々がそれを著者の責任にするのを知っている、そうした事態を懸念し、彼のいずれかの本の写しを読む人々に対し、なにか不適切なことを見つけたとしても、著者自身がみずからの手で多くの訂正をほどこした原著を見るまでは、それを著者のせいにならぬと欲しいと要望している」(牛島信明・上田博人訳)。これほどまでに自分の作品の伝承のあり方を懸念することは当時としては珍しい。

作者はこの説話集を書くにあたり自由に創造するのではなく、題材をアラビアの寓話、聖人伝、西洋古典、スペインの伝承などの規範に求めている。そして典型的な教育者のようにわかりやすさと楽しさを追求しながら、念入りな文体で読者に教訓を示している。このように *El Conde Lucanor* は形式も内容も確かに筋を通した「真面目な」作品である。本書に見られる峻厳かつ信仰篤い Castilla の貴族の生活や思想は同時代の Juan Ruiz の『良き恋の書』*Libro de Buen Amor* の奔放な明るさとは好対照を成している。

●動詞 ir

例としてイソップ (Esopo) の物語を翻案した *El Conde Lucanor* の第二話を読んでみよう。ある時ルカノール伯爵は相談役のパトロニオに「私はあることをしようと考えているが、

それについて悩んでいる、というのは、もしこれをすれば口さがない多くの者が非難するであろうし、またやらないでおけば、これもまた道理なのだが、とやかく言われるに違いないからだ」と言って事情を話し、パトロニオに助言を求めた。

そこでパトロニオは次のようなたとえ話をする。ある日農夫と息子が町の市で買い物をするためにロバを連れていくことにした。はじめロバには何も載せないで二人が歩いて行くと、途中で出会った男たちに、ロバに何も載せないで二人共歩いているようじゃ、あの農夫も息子もあまり賢くはなさそうだ、と言われた。そこで農夫は息子にロバに乗るように言う。さらに道を進むとまた別の男たちから、年寄りの老人が歩いているのに元気な若者がロバに乗っているのはおかしい話だ、と言われる。そこで農夫が息子に男たちの話をどう思うかと聞くと、息子は男たちの言うことが正しい、と答えた。そこで農夫は息子を降ろし自分がロバに乗った。しばらくしてまた別の男たちに出会い、まだ小さな子供を歩かせ苦勞に慣れた大人がロバで行くのはとんでもないことだ、と言われる。農夫は息子に男たちの言うことをどう思うかと聞くと息子は自分も男たちの言っていることが本当だと思う、と答える。そこで、農夫は二人共歩かないですむように息子もロバに乗せた。さらに行くと別の男たちに出会った。彼らは、二人の乗っているロバは弱っていて歩くのがつらそうだ。だから二人が乗って行くなんてとんでもない、と言う。農夫が息子に男たちの言うことをどう思うかと聞くと、息子は、男たちの言うとおりに思う、と答えた。そこで農夫は息子に次のように言った¹。

(...) Ruégote que me digas qué es lo que podemos fazer en que las gentes non puedan travar; ca ya **fuemos** entramos de pie, et dixieron que non fazíamos bien; et **fu** yo de pie et tú en la vestia, et dixieon que errávamos; et **fu** yo en la vestia et tú de pie, et dixieron que era yerro; et agora **ymos** amos en la vestia, et dizen que fazemos mal. Pues en ninguna guisa non puede ser que alguna destas cosas non fagamos, et ya todas las fiziemos, et todos dizen que son yerro, et esto fiz yo porque tomasses exiemplo de las cosas que te acaesçiessen en tu fazienda; ca çierto sey que nunca farás cosa de que todos digan bien.

【語句】 **travar** = criticar 非難する **agora** > ahora 今 **ymos** = vamos, ir の現在 1 人称複数 **guisa** = manera 方法 **fagamos** > hagamos, hacer「する」の接続法現在 1 人称複数 **fiziemos** > hicimos, hacer「する」の点過去 1 人称複数 **sey** > sé, ser の命令形。

¹ テキストは González Ollé. 1980 による。

【訳】 (...) それではおまえに聞くが、他人にとやかく言われずにできることなどあるだろうか。二人で歩いて行ってもよくないというし、わしが歩いておまえがロバに乗っても間違いだという。わしがロバに乗っておまえが歩いて間違いだというし、二人共ロバに乗っても、誤ったことをしているという。この中のいずれかをしなければならないのに、すべてを試してみたところ、全部間違いだと言われたのだ。実はこれはわしがおまえにこれからの人生の教訓にするようにと欲してしたことなのだ。何事であれ万人がよいと言ってくれることなどないということを肝に銘じるのだ。

今回の「理由」に取り上げるのは動詞 **ir**「行く」である。この不定詞形と現在形(**voy, vas, va, vamos, vais, van**)はまったく似ていない。まるで不定詞形が **var** であるかのようだ。実は **ir** の現在形は別のラテン語 **vadere**「川の浅瀬を渡る」という動詞に由来する。ラテン語 **ire** の現在形(**eo**)が極端に短く形式を補充する必要があったのだろう。

ところが上の文中に **vamos** ではなくて **yimos** (= **imos**) という興味深い形が見つかる。これは **ir** 動詞の規則的な変化形であるが、このような形は 1 人称複数(**imos**)や 2 人称の複数(**ides**) しか見つからない。これらは 2 音節なので形を補強する必要がなかったのだろう。現代スペイン語では **imos, ides** が消えて **vamos, vais** となり現在形の活用形が統一された。

また文中には **ir** の点過去形の **fu** (>**fui**) や **fuemos** (>**fuimos**) がある。このように **ser** の点過去と同じ形になった理由を Federico Hanssen の *Gramática Histórica de la Lengua Castellana* は「方向」を示す **ir** が「場所」を示す **ser** と融合した結果であると説明しているが、それとともにラテン語の **ire** の過去形 **ii** が極端に短かったため、やはりここでも同じように形式上の補強が必要だったのだと思われる。

●活性化するメンタリティー

El Conde Lucanor の教訓は恒久の真理を含んでいる。牛島信明氏は訳書の解説で「本書に収められたたとえ話はいずれも時間・空間を超えて人間の心に響き合う、ありふれた、それゆえ陳腐でさえある精神的状況（…）をテーマにしている。そうした古今東西に偏在する〈人間性〉をテーマとし、おまけにそこに教訓を添えていくのであれば、勢い退屈で色褪せたものになりがちであろう。しかし、ここにあるたとえ話にはかび臭さや抹茶臭さはなく、いずれもわれわれに共通のメンタリティーを心地よく活性化させつつ、静かに躍動している」と記している(写真-2)。それを可能にさせた秘密は内容の豊かさとともに効果的に繰り返される形式の統一にもあるのだろう。



■課題テキスト

Don Juan Manuel は明快・素朴な筆致で独特な枠構造(後述)など、機知と創意に富んだ独自の文学世界を繰り広げている。シェイクスピアの「じゃじゃ馬ならし」、アンデルセンの「裸の王様」の古い形や、悪魔に魂を売り渡す物語なども含み、内容・様式ともに完成度の高い第一級の説話文学である。

順序に従って序文から読むが、次の箇所(抜粋)では最初に示したように Don Juan Manuel の作家としての自信と自尊心がよく示されている。

(1)

Et porque don Iohan vio e sabe que en los libros contesçe muchos yerros en los trasladar, porque las letras semejan unas a otras, cuydando por la una letra que es otra, en escriviéndolo, múdasse toda la razón et por aventura confóndesse, et los

que después fallan aquello escrito, ponen la culpa al que fizo el libro; et porque don Iohan se reçeló desto, ruega a los que leyeren qualquier libro que fuere trasladado del que él compuso o de los libros que él fizo, que si fallaren alguna palabra mal puesta, que non pongan la culpa a él fasta que bean el libro mismo que don Iohan fizo, que es emendado, en muchos logares, de su letra. Et los libros que él fizo son éstos, que él a fecho fasta aquí (...) Et estos libros están en el monesterio de los frayres Predicadores que él fizo en Peñafiel.

【語句】 **trasladar** = transcribir 転記する **semejan** = parecerse 似ている **cuydando**, **cuydar** = pensar 考える **confóndasse** > se confunda 混同する **desto** > de esto ここから **fallaren**, fallar > hallar 見つける **bean** > vean ver 見るの接続法 3 人称複数 **monesterio** > monasterio 修道院。

全編(第一部)は 51 話 (exemplos) から成り、次はその第二話である。出典はイソップ (Esopo) 物語である。

(2)

EXEMPLO II

El omne bueno et su fijo eran labradores et moravan çerca de una villa. Et un día que fazían ý mercado, dixo a su fijo que fuesen amos allá para comprar algunas cosas que avían menester; et acordaron de levar una vestia en que lo traxiesen. Et yendo amos a mercado, levavan la vestia sin ninguna carga et yvan amos de pie et encontraron unos omnes que vinían daquela villa do ellos yvan. Et de que fablaron en uno et se partiron los unos de los otros, aquellos omnes que encontraron, començaron a departir ellos entre sí et dizían que non les paresçia de buen recabdo aquel omne et su fijo, pues levavan la vestia descargada et yr entre amos de pie (...) Et entonçe mandó el omne bueno a su fijo que subiese en la vestia.

【語句】 **omne** > hombre 男 **moravan**, morar = vivir 住む **y** > ahí そこで **dixo** > dijo, decir 言うの点過去 3 人称単数 **amos** > ambos 両者, 二人 **avían** menester = necesitar 必要とする **levar** > llevar 運ぶ **vestia** > bestia 家畜 **daquella** > de aquella **do** > adonde 「場所・方向」を示す関係副詞。

(3)

Et yendo así por el camino, fallaron otros, et de que se partieron dellos, conmençaron a dezir que lo errara mucho aquel omne bueno, porque yva él de pie, que era viejo et cansado, et el moço, que podría sufrir lazeria, yva en la vestia. Preguntó entonçe el omne bueno a su fijo que quel paresçia de lo que aquellos dizían; et él dixol quel paresçía que dizían razón. Estonçe mandó a su fijo que dicese de la vestia et subió él en ella.

【語句】 **dizían** > decían, decir の線過去 3 人称複数 **dicese**, decir = bajar 降りる。

(4)

Et a poca pieça toparon con otros, et dixieron que fazía muy desaguisado dexar el moço, que era tierno et non podría sufrir lazeria, yr de pie, et yr el omne bueno, que era usado de pararse a las lazerias, en la vestia. Estonçe preguntó el omne bueno a su fijo que qué paresçie destes que esto dizían. Et el moço dixol que, segund él cuydava, quel dizían verdat. Estonçe mandó el omne bueno a su fijo que subiese en la vestia porque no fuese ninguno dellos de pie.

【語句】 **pieça** = rato 短い時間 **lazeria** (s.XIII) = miseria, pobreza **usado**, usar (s.XIV, XV)= acostumbrar, tener costumbre de **pararse a** = sufrir。

(5)

Et yendo así encontraron otros omnes et començaron a dezir que aquella vestia en que yvan era tan flaca que abés podría andar bien por el camino; et pues así era, que fazían muy grant yerro yr entramos en la vestia. Et el omne bueno preguntó al su fijo que qué semejaba daquello que aquellos omes buenos dizían; et el moço dixo a su padre quel semejaba verdat aquello. Estonçe el padre respondió a su fijo en esta manera:

【語句】 **abés** > apenas ほとんど...でない **entramos** > ambos 二人。

(6)

[前掲 (a)]

(7)

EXEMPLO VII

Señor conde --dixo Patronio--, una muger fue que avie nombre doña Truana et era asaz más pobre que rica; et un día yva al mercado et levava una olla de miel en la cabeça. Et yendo por el camino, comenzó a cuydar que vendría aquella olla de miel et que compraría una partida de huevos, et de aquellos huevos nazçirían gallinas e después, de aquellos dineros que valdrían, compraría ovejas, et assi, comprando de las ganancias que faría, que fallóse por más rica que ninguna de sus vezinas.

【語句】 **avía** > tenía 持っていた **asaz** = bastante 十分に **vendría** > vendería, vender 「売る」の過去未来 **fallóse** > se halló ...になった。

(8)

Et con aquella riqueza que ella cuydava que avía, asmó cómmo casaría sus hijos et sus fijas, et cómmo yría aguardada por la calle con yernos et con nueras et cómmo dirían por ella cómmo fuera de buena ventura en llegar a tan grant riqueza, seyendo tan pobre commo solía seer.

【語句】 **asmó**, asmar = pensar 考える **aguardada**, aguardar = proteger 守る。

(9)

Et pensando en esto començó a reyr con grand plazer que avía de la su buena andança, et, en riendo, dio con la mano en su fuente, et entonçe cayol la olla de la miel en tierra et quebróse. Quando vio la olla quebrada, començó a fazer muy grand duelo, toviendo que avía perdido todo lo que cuydava que avría si la olla no le quebrara. E porque puso todo su pensamiento por fuza vana, non se fizo al cabo nada de lo que ella cuidava.

【語句】 **fruenta** > frente 額(ひたい) **toviendo, tener** > teniendo, tener 持つ, 考える
fuza, fuzia = confianza 期待。

* **物語の枠構造** 作者 Don Juan Manuel は、ルカノール伯爵(Conde Lucanor) が相談役のパトロニオにさまざまな困難の解決法を相談し、パトロニオがたとえ話をしながら適切な助言を与える、という構造を一貫して用いている。ここに、作者ルカノール伯爵とパトロニオ—たとえ話中の登場人物という3つの枠構造が設定されるが、各説話の末尾に付された格言で、枠構造の一番外側に位置する作者自身が三人称で登場し、話全体を記録させた上、自ら教訓詩を書いている。つまり、パトロニオのたとえ話がルカノール伯爵によって受け入れられることにより、「単なる寓話が間接的に歴史の枠に組みこまれ、それがさらに、作品の中に顔を出すドン・フアンのつくる最後の二行詩によって、作者自身の生や歴史的状況と結びつけられている」²ことに注目したい。

こうした枠構造を見るために、次は第二十九話全体を読むことにしよう。

(10)

EXEMPLO XXIX

- Patronio, un mio pariente vive en una tierra do non ha tanto poder que pueda estrañar cuanta escatimas le fazen et los que han poder en la tierra querrían muy de grado que fiziessse él alguna cosa por que hobiessen achaque para seer contra él. Et aquel mio pariente tiene que le es muy grave cosa de sufrir aquellas terrerías quel' fazen, et querría aventurarlo todo ante que sufrir tanto pesar de cada día. Et porque yo quería que él acertasse en lo mejor, ruégovos que me digades en qué manera le conseje por que passe lo mejor que pudiere en aquella tierra.

【語句】 **estrañar** = rehuir, esquivar 避ける **escatima** = agravio 侮辱, 攻撃 **terrería** = desaguizado 不正, 暴力。

(11)

Señor conde Lucanor, dixo Patronio, para que vós le podades consejar en esto, plazermé yá que sopiéssedes lo que contesció una vez a un raposo que se fezo muerto.

² 牛島 (1997), p.85.

El conde le preguntó cómo fuera aquello.

【語句】 **plazerme ya** > me gustaría ...であれば幸いです **fezo** > hizo hacer の点過去 3人称単数。

(12)

Señor conde, dixo Patronio, un raposo entró una noche en un corral do avía gallinas. Et andando en roýdo con las gallinas, quando él cuidó que se podría ir, era ya de día e las gentes andavan ya todos por las calles. Et desde que él vio que no se podía asconder, salió escondidamente a la calle e tendióse assí como si fuesse muerto.

【語句】 **do** > donde 「場所」の関係副詞 **asconder** > esconder 隠れる。

(13)

Quando las gentes lo vieron, cuydaron que era muerto et non cató ninguno por él.

A cabo de una pieça passó por ý un omne e dixo que los cabellos de la fuente del raposo que eran buenos para poner en la fuente de los moços pequeños porque no les aojen. Et trasquiló con unas tiseras de los cabellos de la fuente del raposo.

【語句】 **cabello** = pelo 髪の毛 **fuente** > frente 額(ひたい) **aojen**, **aojar** = causar el mal de ojo 目の病気にする **tiseras** > tijeras はさみ。

(14)

Después vino otro et dixo esso mismo de los cabellos del lomo. Et otro, de las yjadas. Et tantos dixieron esto fasta que lo trasquilaron todo. Et por todo esto, nunca se movió el raposo, porque entendía que aquellos cabellos non le fazían daño en los perder.

Después vino otro e dixo que la uña del polgar del raposo que era buena para guaresçer de los panarizos; e sacógela. Et el raposo non se movió.

【語句】 **polgar** > pulgar 親指 **guarescer de** = curar 治療する **panarizo** = panadizo ひょうそ(手や足の指の化膿による炎症)。

(15)

Et después vino otro que dixo que el diente del raposo era bueno para el dolor de los dientes; e sacógelo. Et el raposo non se movió.

Et después, a cabo de otra pieça, vino otro que dixo que el coraçón era bueno para el dolor del coraçón et metió mano a un cochiello para sacarle el coraçón. Et el raposo vio quel querían sacar el coraçón e que si gelo sacassen, non era cosa que se pudiesse cobrar et que la vida era perdida et tovo que era mejor de se aventurar a quequier quel pudiesse venir, que soffrir cosa porque se perdesse todo. Et aventuróse e puñó en guarescer et escapó muy bien.

【語句】 **cochiello** > cuchillo ナイフ **quequier** quel > cualquier que le。

(16)

Et vós, señor conde, conseiad a aquel vuestro pariente que si Dios le echó en tierra do non puede estrañar lo quel fazen commo él querría o commo le cumplía, que en quanto las cosas quel fizieren fueren atales que se puedan soffrir sin grand daño e sin grand mengua, que dé a entender que se non siente dello e que les dé passada. Ca en quanto da omne a entender que se non tiene por maltrecho de lo que contra él an fecho, non está tan envergonçado; mas desque da a entender que se tiene por maltrecho de lo que ha reçebido, si dende adelante non faze todo lo que deve por non fincar menguado, non está tan bien commo ante.

【語句】 **envergonçado** > avergonzado 恥じている。

(17)

Et por ende a las cosas passaderas, pues no se pueden estrañar como deben, es mejor de les dar passada; mas si llegare el fecho a alguna cosa que sea gran daño o gran mengua, estonce se aventure e non lo sufra, ca mejor es la pérdida

o la muerte, defendiendo homne su derecho e su honra et su estado, que vevir pasando en estas cosas mal e deshonoradamente.

【語句】 **vevir** > vivir 生きる。

(18)

El conde tovo éste por buen conseio. Et don Ioan fízolo escribir en este libro e fizo estos viessos que dizen assí:

*Sufre las cosas en quanto divieres,
estraña las otras en quanto pudieres.*

【語句】 **viessos** > versos 詩 **divieres** > debieres deber の接続法未来 2 人称単数 **estraña** > evita 避ける。

この話は『七賢人物語』(Libro de los siete sabios)にある。当時よく知られていたらしく、フアン・ルイス(Juan Ruiz)の『良き愛の書』(Libro de buen amor、1412-1425 行)にも載せられている。

【課題 10a】 現代スペイン語の動詞の中で不定詞が単音節になるものを探し、その不規則性を歴史的に考察しなさい。

【課題 10b】 それまでのスペインの文学作品と比較しながら Don Juan Manuel の作者としての意識について考察しなさい。

【課題 10c】 枠構造の物語の例をスペインと日本を含めた世界の文学から探しなさい。この形式で物語る効果について考察しなさい。

【参考】

Alcina Branch, Juan. 1978². *El Conde Lucanor y otros cuentos medievales*. Barcelona. Editorial Bruguera.

Alvar, Carlos y Pilar Palanco. 1984. *Don Juan Manuel. El Conde Lucanor. Edición y notas*. Barcelona. Planeta.

González Ollé, F. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales*. Barcelona. Ariel.

Hashimoto, Ichiro. 1984. 橋本一郎(訳注)『ドン・フアン・マヌエル。ルカノール伯爵』大学書林

Moreno Baez, Enrique. 1979. *El Conde Lucanor. En versión española moderna*. Madrid. Castalia.

牛島信明. 1997. 『スペイン古典文学史』名古屋大学出版会。

牛島信明・上田博人訳. 1994 『スペイン中世・黄金世紀文学選集 3. ルカノール伯爵』国書刊行会

FIN